優秀賞

中学生区分

すべての人が幸せな未来を目指して

豊見城市立豊見城中学校　三年
町田　芽吹

人はなぜ、周りと違う人を分類したがるのだろうか。他の人と違うということは、そんなにもおかしなことなのだろうか。そもそも、なにもかも自分と同じ人なんて存在しない。血の繋がっている家族でさえも、顔や性格が全く同じではないのに、血の繋がっていない人と自分が同じであるわけがない。

私は、全ての人が同じ人間として、平等に幸せであるべきだと思う。

私には、ダウン症候群という障がいをもったおじさんがいた。おじさんは、喋ったり、自分で真っ直ぐ歩いたりすることができなかった。でも、自分の気持ちを笑ったりして表現することはできた。おじさんは、私のおばあちゃんと一緒に暮らしていて、私が家に遊びに行くと、笑ったり、拍手をしたりして迎えてくれた。そんなおじさんのことが私は好きだった。

しかし、私は、おじさんと一緒に外に出掛けることがあまり好きではなかった。なぜなら、外に出掛けると必ず他の人から目を向けられてしまうからだ。別に、悪口や非難の声をかけられるわけではなかったのだが、私はその視線が嫌いだった。ただ他の人と同じように外に出掛けて、楽しんでいるだけなのに、どうして視線を向けられないといけないのか、私には分からな

かった。でも、それはきっと、おじさんが障がい者だからだ。周りの人は、おじさんを「普通」ではないと見ていたのだ。

私は、「普通」という言葉は存在しなくていいと思う。「あの人は普通じゃない。」などという言葉を耳にすることがあるが、その「普通」とは何なのだろうか。他の人と違うということはだめなことなのだろうか。そう考えたとき、私は思った。他の人と違うということは悪いことではない。むしろ、他の人にはないものをもっているのは、とても素晴らしいことだと。そう考えるようになってから、私は、おじさんと出掛けることが好きになった。私に、このような考え方を見つけさせてくれたおじさんには、今も感謝している。

今よりも、他の人との違いや個性を認め合える人が増え、どんな人でも幸せに過ごすことができるあたたかい世界が、少しずつでも広がっていってほしいと私は思う。そして、そんなあたたかい世界を広げるために、私は自分の体験を通して知った、人と人との違いや個性の素晴らしさを周りの人に伝えていきたい。